

【編集後記】

コロナ時代における様々な「ニューツーリズム」——「モノ消費」から「コト消費」へ

第一次、二次の世界大戦を境とした「アヴァン ゲール（戦前）・アプレ ゲール（戦後）」という区分があるが、後の歴史には、「コロナ前・コロナ後」という言葉もあるかもしれない。一時の猛威は見られないものの、現在もなおその渦中にある。殆ど全ての人々、業種が影響を受けたが、中でも、人の移動と密を伴う観光分野では大きな打撃を受けた。これを打破すべく、マイクロツーリズム、グランピング、オンラインツアー等の旅行形態も普及した。また、ニーズの多様化を反映した新たな切り口による魅力ある観光のテーマづくり、観光体験等を目的とするいわゆる「コト消費」に熱い視線が注がれ、様々なバリエーションが模索されている。

先日の報道で、旅行会社のインバウンド担当者らを対象としたモニターツアー、「滝修行体験ツアー」が紹介されていた。泉佐野シティプロモーション推進協議会が旅行各社に呼び掛けたもので、修験道の霊場である真言宗犬鳴派の大本山で日本遺産にも認定されている「犬鳴山七宝瀧寺」で、白の修行衣を纏い、実際に滝行という非日常を体験する。加えて、アウトドア関連のモンベル（大阪市）が山歩きや装備等を指導、大阪体育大学剣道部が剣道の出張授業を行う等、インバウンド増加を狙い、日本ならではの体験を重視する「コト消費」に着目したもので、日本の精神文化に関心の深い富裕層をターゲットにしたものという。

ニューツーリズムとは、従来型の観光旅行（いわゆる物見遊山的な）ではなく、テーマ性の強い体験型の新しいタイプの旅行形態をいう（例えば、産業観光・エコツーリズム・グリーンツーリズム・ヘルスツーリズム等）。旅行者が様々な地域や施設を訪れ、人々と交流し、地域の文化財や歴史観光資源等に接する。旅行者の出発地で商品化される「発地型」商品と異なり、「着地型」商品として、訪れた地域が主体となって、付加価値をプラスした商品化を図り、地域の活性化に繋げることが期待されている。

観光庁は、「国内外の観光客に新たな地域への来訪機会を与え、地方誘客を図る」ことを目的に、2016年度から「テーマ別観光による地方誘客事業」に取り組んできた。食や文化財、アニメ、古民家、星空観賞等々、特定の観光資源を活用している複数の地域から構成されるネットワークを対象として、その充実と拡大等を支援し、観光資源のブラッシュアップ、地方への誘客を導くというもので、大変興味深い17のテーマが取り上げられた。それぞれに全国組織がつくられ、その展開が注目されている。概要は次の通りである。

①エコツーリズム ②街道観光（日本を代表する歴史的街道である東海道や中山道、日光街道等で、街道や沿線の城下町、宿場町がもつ資源の観光活用。後世への継承も） ③酒蔵ツーリズム ④社寺観（全国に点在する神社仏閣を様々なテーマで結ぶ。「家康ゆかりの社寺」「修験道」等） ⑤明治日本の産業革命遺産（ファムツアーを通じた周遊モデルコース等） ⑥ロケツーリズム（「ロケ地」を観光資源として、効果的なシティプロモーションに活用。フィルムコミッションの設置も） ⑦アニメツーリズム（国内外のファンの投票で「アニメ聖地」を選定。地域とアニメ作品、関連企業等を結び、モニターツアーの実施、グッズ開発、広域周遊観光ルート） ⑧古民家等の歴史的資源（各地の好事例発信・利活用のための資金調達等のノウハウも紹介） ⑨サイクルツーリズム（「ツール・ド・ニッポン」を母体に、各地に定常的なサイクリストの誘客を図る） ⑩全国ご当地マラソン（日本全国のマラソン大会の情報集約、参加者増と地方消費の拡大を図る） ⑪日本巡礼文化発祥の道（世界に向けて、西国巡礼三十三所「日本最古の巡礼文化」の普及） ⑫忍者ツーリズム（忍者に関わる自治体のネットワーク化。「NINJA」は、サブカルチャーとしても人気を博し、世界中に忍者ブームを） ⑬百年料亭（日本各地の100年以上の歴史をもち、今も営業している料亭を守り伝承。海外の旅行展への出展も） ⑭Industrial Study Tourism（訪日外国人のビジネス客を対象に日本の産業機械、工場遺構、生産現

場、日本のものづくりの心にふれる) ⑮ ONSEN・ガストロノミーツーリズム(日本の温泉地を拠点に、食や文化に親しみ、滞在型・体験型の観光) ⑯郷土食探訪～フードツーリズム(その地域ならではの旬の食材を、自然の景観の中で味わい、脱日常を体感) ⑰宙ツーリズム(星空や天文現象だけでなく、御来光、ロケット打上げの見学等を楽しむ。宇宙に関する専門家や自治体、企業等が連携する)

いずれも、特にインバウンドの地方誘客を強く意識したものといえる。観光に関わる分野の裾野は広く、今後、ますます国内外での競争も激しくなろう。自然や歴史をふまえた地域の文化的な魅力の集積や懐の深さが、人の賑わいを呼び、創造的な経済活動を生み出すと思われる。

(谷 奈々)

21世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

VOL.102

発行 2022年12月15日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町2丁目1番地
フォルテワジマ6階
TEL 073-432-1444 (代)
FAX 073-424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 白光印刷株式会社

無断転載・複写を禁ずる

裏表紙の写真は、当研究所 OB 萬羽昭夫氏撮影